

■ 研究演習 I 紹介

社会福祉学科

室田保夫ゼミ

人間福祉学部一期生が3年生となりようやく今年度よりゼミが始まったが、小生のゼミは11人でスタートすることになった。4年生は社会学部最後のゼミであり、それも24人という大世帯であることから、今年度からのゼミは学生が半減しており少数精鋭という期待もあった。しかし総体的にみて、とりわけ社会福祉学科ということもあり学生についてはそう変わるものではない。社会から人間福祉へと学部が変わっただけである。

小生のゼミのテーマは「社会福祉を歴史から見る－過去・現在・未来」というものであり、社会学部から同じテーマにしている。すなわち社会福祉というものは歴史的産物であることの確認と、その視点なしでは本質的な理解に及べないという拘りもある。社会福祉が社会的存在かつ歴史的存在であることへの認識が重要なのである。もちろん学生にとっては関心が現在の諸問題に対してストレートに取り組みたいという希求もあり、迷惑なことかもしれないが、最初、まずプレーキを踏んで少しじっくりとみていくことを要求している。

そこで今年は前期に於ては『日本社会福祉の歴史』等を参考にしながら、『人物でみる近代日本の社会福祉のあゆみ』をテキストにして、各自が興味ある人物を調べて発表していくという方法をとった。何某かに興味をもっているはずであるから、調べることにについてモチベーションがあるはずであり、主体的な方法があるかと思っているが、やはり学生には温度差があり、また他人の発表にも関心を示し議論に参加するということの難しさはいつも痛感する。

しかしこういう事によって、久しぶりに図書館に足を運び、また検索し、そしてまがりなりにもレジュメを作成し、発表をするという基本的なことが少しずつでもあるが身についていけばと、思っている。もちろんこれは基礎ゼミで習得して



おくべきことかもしれないが、やはり3回生のゼミでやっていくことにある種の意義もあるのだろう。学生の活字離れが憂慮されているが、少しでも本への興味や学ぶ面白さがつけられればときわめて楽観的に考えてもいる。人間は主体的な発露なしには何も生きたものにならないという自己流の哲学がある。

秋学期はもう少しテーマを絞って、やっているが、テーマを絞り共通のテーマにすることによってゼミのアイデンティティーが築かれればと願っている。またテーマに即した形で現場見学を計画している。そして発表は次第に卒業論文(2万字)への準備に入る。卒業論文は4年間の総括であり、成果である。このような機会は人生において最初で最後かもしれない。学生のポテンシャルは想像以上にあるし、それを引き出してやるのも我々の責務でもあろう。本格的な取り組みは4年生になるが、最低3年生の間に卒業研究のテーマを考えておくようにしているが、しかしなかなか難しい。またこの秋学期後半に入れば、学生たちは就職のことに関心がシフトしていく現実もある。

ところでゼミは研究だけでなく、懇親会(飲み会)もある。幸い4回生のゼミがあるので、いわゆる「タテコン」なるものを春学期に実施した(秋も企画中)。総勢30名近くが集まり、なんと賑やかなことであった。「美は乱調にあり」である。飲み会やゼミ旅行といった機会は、学生の普段から見えない部分がみえてきて、意外な個性を

発見するいい機会でもある。どうしても年をとると(?)、当世の学生気質は、というような愚痴にも似た話にもなるが、本質的には変わらないものがあったりして、少し安心したりしている。

(室田 保夫)

社会福祉学科

安田美予子ゼミ

やさしいけど時には厳しい、課題大好きな安田先生が率いるこのゼミは学生数9人のとってもアットホームなゼミです。「家族福祉」をテーマとしており、家族や福祉にかかわることを、児童や高齢者、障害者の領域にとらわれず幅広く勉強しています。扱う領域が広いので調べるにあたって難しいこともありますが、広い視野を持って考えることができるようになります。

春学期はみんなで一冊の本を読み、その本に対して批評をしたり、問題提起をしてディスカッションをしたりしました。今まで本の批評などしたことなかった私たちにとっては、「ゼミが始まっていきなりこんなに難しいことやるの?」と思うくらいかなり苦しんだ課題でした。はじめはディスカッションもうまく進まず、先生に助けられてばかりいましたが、春学期の終わりにはみんな慣れてきて、自ら問題意識を持ち、以前よりも内容の濃いディスカッションができるようになりました。ディスカッションは児童虐待や国際結婚、法律婚と事実婚、国家政策など様々な問題を扱いましたが、私たちはいつも「その問題に対してソーシャルワーカーができることは何か」ということを考えました。みんなで考えると様々な意見が出てきて面白いです。自分が今まで持っていなかった視点や価値観を取り入れることができ、とても勉強になりました。またこのディスカッションを通して、ソーシャルワーカーにはクリエイティブな力や柔軟性というのが必要となってくることもわかり、ソーシャルワーカーの仕事の面白さや難しさ、可能性を感じることができました。



また、安田ゼミで毎週恒例なのが「新聞スクラップ」です。これは先生が春学期に突然出した課題の一つで、福祉に関する記事を切り抜き、自分なりに意見をまとめてくるというもの。「また課題増えるの?!いややなあ…」と思いながら始めましたが、新聞には情報がたくさんあって、みんなで共有することは、とてもためになりました。新聞を読む癖もつくようになり、社会人への第一歩も踏み出せたのではないかと思います。

秋学期のゼミは2～3人のグループを作ってそれぞれテーマを決めて研究を進めていく「グループワーク」と、ゼミ全体でソーシャルアクションを起こそうという「ゼミワーク」の2本柱で進めました。グループワークは3つに分かれていて「食育と家族」「父子家庭について」「不登校児童と家族のかかわり」をテーマに、研究を行いました。

ゼミワークは「小学校・中学校に対する福祉教育」をテーマに進めています。今後は当事者や学校の先生と連携を図り、福祉教育のプログラムを考え、小学生や中学生に働きかけ、障害者理解や思いやりの心を育てていくきっかけを作れたらと考えています。

3回生のゼミ活動を通して、自分たちの関心を深め、卒論に繋げていけるような研究をしていきたいです。

(安田ゼミ3年生 鴨宮 萌)

社会起業学科

小西砂千夫ゼミ

【16クラス】

社会起業のシーズは、経済的な観点でみると、大きく分けて、①国際的な貧困問題、②国内の貧困問題、③地域格差の問題、の3つであると整理できる。このゼミでは、主に②と③である国内の貧困問題と地域格差の問題を主に取り上げている。もっとも理論的なアプローチはあまり前面に出さないで、どちらかといえばフィールドワークを中心に、自分の目と耳で見たもの、聞いたものを通じて、現代日本の課題に触れて感じ取ることに力点を置いている。

それと同時に、研究演習においてもっとも重視していることは、プレゼンテーションの能力と、ディスカッションを通じて、プレゼンテーションの趣旨を生かすように発言をして、個々の貢献を全体の成果として共有するような場づくりの能力を身につけることである。

春学期には、あえて共通のテキストを使わずに、ゼミ生が各自1冊のテキストを自ら選んで、それを深く読み込んで報告する形を採った。報告に対して、各自がゼミの時間中で最低1回は発言するようにしている。また秋学期にはそれぞれ夏季休暇中に行った研究またはフィールドワークの成果をパワーポイントによってプレゼンテーションを行うようにしている。

フィールドワークとしては、5月に高知県越知町にある横畠地区に伺った(写真)。調査では高知県庁の全面的な協力を得ることができた。横畠地区は少子化・高齢化の人口減少にあって、住民が強い結束力をもって懸命にまちづくりに努めている集落であり、そこでの暮らし、地域おこしの現状に触れて、地域に生きることをかいま見ることができた。また漢方薬を中心とする製薬企業であるツムラのCSRの現状にも触れることができた。横畠地区の地域住民のみなさんとの交流は、大きな宝物となった。

夏季休暇には全員参加ではなかったが、北海道ニセコ町と中札内村にインターンシップに出かけ



た。2名のゼミ生がニセコ町役場に1週間滞在し、そこでさまざまな業務を経験した。また中札内村では、村役場と、村にある六花亭の施設である中札内美術村で、同じく1週間、インターンシップを行った。特に、美術村における業務では民間企業の企業経営の厳しさや、職場での人間関係を取り結ぶ必要性などについて得難い経験をしている。北海道というゼミ生たちが経験してこなかった環境に触れること、インターンシップを通じて職場の組織風土に接することは、今後、何らかの形でゼミ生の将来に生かされるものと思われる。

また、秋学期には生活保護率の高い自治体におけるフィールドワークを実施している。生活保護が高い理由は、自治体によって大きく異なる場所があり、また生活保護行政の一線に立つ職員が、生活保護行政の本旨を貫くために、どのような課題と向き合っているかのお話を伺う機会に触れ、強い印象を得ることができた。現実には惨憺たるものであるが、厳しい状況に飛び込んで、課題と向き合うことに、人の営みの尊さがあることに触れたことは大きな成果であった。

【17クラス】

このゼミは神野直彦先生のゼミに所属することを希望し、先生がゼミ生を選んだ後に、退職が決まったという経緯がある。神野先生は退職してしまわれたので、時間割上は神野ゼミと表記されることはないが、ゼミ生は神野ゼミという自覚を持っている。神野先生には、毎週ではないが、何度もゼミの指導をしていただいており、合宿や旅行等を通じて神野先生の人柄にゼミ生が触れる機会を設けていただいている。

春学期には、月刊誌『世界』『voice』などから注目すべき論文を購読し、現代社会の経済、社会



の問題について学び、ゼミ生で討論を行った。また、5月には神野先生とともに軽井沢で合宿を行い、そこでさまざまな議論を交わした。それらを通じて、ゼミ生の共通の関心が、現代の貧困問題の諸相に触れ、それを深く掘り下げて、その背景にある課題を明らかにするという方向に収束するようになった。

夏季休暇中には、三重県南伊勢町で合宿を行った。南伊勢町の町長は三重県職員として、いわゆる北川改革にも関わった方であり、神野先生や小西とも面識がある。南伊勢町では神野先生が住民向けの講演を行い、ゼミ生はそれを拝聴することができた。また、南伊勢町で取り組んでいる健康づくり政策について、町長と町立病院の病院長から直々に説明を伺う機会が得られた。また、南伊勢町で農村の暮らしを通じて、住民の交流を行っているところを訪問し、炭焼き活動などをかいま見ることができた。

11月下旬には、これまでの研究成果の報告会を、関西学院大学東京丸の内キャンパスで、神野先生の東京大学時代の教え子のみなさん11名を聴衆として実施した(写真)。そのテーマは、『「分かち合い」の思想で活路を見いだす都市の貧困・地域の衰退 フィールドワークによるアプローチ』である。

そこでのテーマは、まず、現代日本における貧困問題として、非正規雇用のもとで十分な所得が得られずに就労しながら貧困に苦しむ、いわゆる「溜のない」人たちとその実態と、それをどのように救済しようと取り組んでいるかの現状の調査、アンケート調査や聞き取り調査を通じて、高校教育の現場において浮かび上がる家庭環境と教

育および職業選択の関係性、定時制高校に進学する生徒たちの思いなどについての調査、ニートと呼ばれる人たちの実態とその支援の現場での声について、いずれも実態調査を行った。また、将来の介護サービスの維持向上に欠かせない有償ボランティアの可能性についての調査を行った。さらに、地域格差の現状の調査として、フランスのナントなど、ヨーロッパにおける地域再生では文化がカギになっていることに着眼し、日本の地域再生のあり方の検討、福井県において地域鉄道の維持に取り組んでいる取り組みの現状、同じく福井県における商店街の再生の努力への取り組みの調査について報告を行った。

報告会の参加者からは、時折厳しい指摘もあったが、フィールドワークを中心として実態を浮かび上がらせようとするゼミ生たちの報告に、おおむね好意的な意見を頂き、卒業論文等につながる建設的なコメントをいただいた。

(小西砂千夫)

人間科学科

藤井美和ゼミ

藤井ゼミは、『「生と死・いのち」を考える』(死生学)をテーマに、1期生10名(女性6名、男性4名)でスタートしました。社会福祉士や精神保健福祉士を目指す人、体育会やサークルで頑張る人、新しい知識や読書大好きな人、ボランティアを続ける人、ディスカッション大好きな人、音楽を愛する人、演劇に燃える人、まじめにバイトする人…とユニークな面々ですが、どのメンバーも心優しい人であり、これまでの経験や学びの中で感じ取った「いのち」への思いからこのゼミを選択した「生き方を問う人」たちです。3回生のゼミ目標は、①価値観を構築し新しい経験と知識を得る、②文献検索、プレゼンテーション、論文作成の力を身につける、③支えあい許しあい、互いに必要な存在になるの3つです。

ゼミでは、生命倫理やいのちのあり方を理解す

るために必要な理論を学び、それを土台としてのいのちに関わるトピックに取り組みました。特にパーソン論や選好功利主義についての課題はかなり大変だったようですが、それらがいのちの議論に重要かつ必要なものであることは、トピックに取り組むうちに実感できたように思います。これまでに取り組んできたトピックは、ホロコースト、告知、子どもの死生観、出生前診断と選択的人工妊娠中絶、自殺等です。春学期はこれらのトピックを3つのステップで学んできました。まず、グループによるプレゼンテーション、次に知識を得た上でのディスカッション、そして最後に各自の研究を加え自分の意見を述べるレポートの作成。プレゼンテーションとディスカッションは学生同士が評価しフィードバックを行います。ディスカッションでは、自身の考え方の背後にある価値観に注目します。「こうあるべき」ではなく、「自分がこのように感じるのは…」というスタイルで、自身の価値観や思いが自由に展開されることでハッとさせられることがあり、お互いがたくさん気づきと学びを得ています。また理解を深めるために、いのちを見つめるワークショップやDVD等も組み入れました。

秋学期はプレゼンテーションの他に、生命倫理

における議論を整理し、現在はそれぞれ卒業論文のテーマを絞っている段階です。12月には、4回生（社会学部社会福祉学科4回生藤井ゼミ生）の卒論発表に参加し、リサーチクエストが卒業論文の中でどのように明らかにされていくのか学びました。また、千刈キャンプでの「人生って素晴らしい」をテーマとした4回生との合同合宿は、自分と人とゼミに向きあう有意義な時となりました。

藤井ゼミは、ゼミ運営についても学生が主体的に取り組んでいます。各自がゼミの中で何らかの役割をもち、教員は、課外活動や見学などゼミ生からの要望に応えられるように準備しています。ゼミ開始当初は緊張していたゼミ生たちも、それぞれの考えや経験を分かち合い、ゼミ目的の1つである、お互いが必要な存在になることを少しずつ実現しているように感じます。

最後にゼミを代表してゼミ長、澤田奈緒美から一言！①ゼミに入って感じていること：今私たちが生きていることは奇跡であり、全ての命に価値の差はない。命とは宝物。②これからについて：生と死についてこのゼミでより深く研究し、生きる喜びや人の痛み、命の重みがわかる人間になり、社会に貢献したいです。

（藤井 美和）

